

---

# 目にしみるから。

このはな さくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

目にしみるから。

### 【コード】

N4604T

### 【作者名】

このはな さくら

### 【あらすじ】

ハンバーグをつくるために玉ねぎを刻んでいる途中、問題が発生してしまった。どうしよう……乙女のピンチです。

ツン、と、しみる玉ねぎのニオイ。

あ、きた！

泣きたくないのに、涙がポロポロとでる。目を開けてなんかいられない。

「やばっ」

ツーツと鼻腔をつたう液体の流れ。あわてて、目の前にあったロール式ペーパータオルの端っこをつかんだ。グイッと力の限り引きちぎる。

「ミュウミュウどうした、指切ったの？」

心配性なリュウに聞こえないように、小さく声をあげたつもりだったけれど。自分が思っていたより、ボリュームが大きかったみたい。

隣のリビングで、のんびりクイズ番組を見ていた彼が、いきなりソファから立ち上がった。キッチンまで、スゴい勢いでスツ飛んでくる。さすが、陸上部。あっというまにゴール。私の前に立つ。

「アレ、なんで……泣いているの？」

クチャクチャにしたペーパータオルで鼻と口をおさえながら、包丁を持っている私。可笑しな格好の私を見て、きよとん、とする彼

どうしてなんだろう。私が涙を流しているワケが、本気でわからならしい。ちょっと、ムカつく。

「アンタが、ハンバーグを食べたいって言ったから、玉ねぎが目にしみるのっ」

正しくは、『玉ねぎのみじん切りをしているから、目にしみるのっ』なんだけども。

さりげにリュウのせいにして、まな板のうえの玉ねぎをビシッと指でさす。

高校生になってもリュウは、相変わらずで。子供のころから、お調子者のクセにポーっとしてばかりいる。だから、私がいつもフオローする役回り。自然に引き受けているの。

そこんところ、肝心の本人は、わかっているのかなあ。わかっていないだろうなあ、たぶん。幼なじみの私が、ハッキリ言ってやらなきゃ、だもの。なんか、ドツと疲れる。

「そっか。ゴメン！」

やっと状況を把握してくれた彼が、「あはは」と、気まずそうに笑った。

そこで、問題が発生。リュウが見ている前では、鼻をかむことができない。

もし、今ここで鼻をすすったりしたら、ただでさえレベルが高い

とは言えない私の女子力が、いちだんと下がっちゃっ。

幼なじみ兼カノジョって、こついつときがツライよね。

「はやく向こうに行つてよ。ジャマー!」

彼氏だったら、察してほしい。いくら付き合いが長いと言っても、乙女の恥じらいぐらいあるんだもの。恥ずかしくって言えないけれど。私、女の子なんだよ。

「だって、いいニオイがするからさ。料理しているところ、見たくなっちゃったんだよね。ジャマにならないようにしているから、見せてもイイっしょ?」

ぜんっぜん、通じてなあいつ! 子犬のように鼻先をクンクンさせて、リュウがにっこりする。

そのいいニオイが、私が困っている原因。玉ねぎのニオイのせいで、乙女のピンチ、だつっーの。今はまだ、下ごしらえの段階。材料を切っているところなのっ。

「バカ! どう言えば、わかってくれるの? アンタがいると鼻がかめない、って言ってるのにーっ。もうっ、リュウのばかーっ」

とうとうガマンができなくて、声を荒げてしまった。

幼なじみのつえに、カップルだつていうのに。もう少し、空気読め!

ロマンチックな恋のカケラを期待してもムダ。仕方がないのかな。

「はあ」と、ため息が出る。

「なーんだ、そんなことか」

ポツリと、彼がつぶやく。そのとき、私は気が付いた。

しまった……私のバカっ。自分から言っちゃった、どうしよう！

「じゃ、どうしよう、っ」と

えっ。

私の心を読んだように、彼は言った。私から包丁を取り上げて、まな板のうえに戻す。

「なんか言った……あっ」

ふいに手首を引っ張られる。足が前によるめいて、気づいたら彼の腕の中。すっぽりと温もりに包まれていた。

トクン、と、胸が鳴る。

「ほら、こうすればいいだろう？ 見えていないから、だいじょうぶ。ゆっくり、かみなよ」

わたしの頭のうえで、彼がささやいた。

「う、うん……」

玉ねぎを刻むのはニガテ。目にしみるから。でも、時々はいいか  
な。本当に。たまには、だけど。

「あのさ、耳もふさいでよ。音が聞こえちゃうんだもん」

「だーめ」

「なんで?」

「こっつしたい、からな」

さっきよりも、ずっと強い力で抱きしめられた。息が止まりそう  
になってしまった。私は、鼻をかむことを忘れてしまった。

(後書き)

読んでくださいますと、ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4604t/>

---

目にしみるから。

2011年5月23日08時01分発行